

専門部会

学力向上対策部会

I 運営方針

河北町内の全児童生徒の学力をより一層向上させるため、課題意識を共有し、情報交換を行いながら授業改善に取り組む。特に今年度は、児童生徒に必要な資質・能力を検討し、各校の実態に応じた実践を行い、成果や課題を交流する。

II 活動の内容

1 第1回学力向上対策部会議

6月20日（金）西里小学校

- (1) 部会組織、運営方針、事業計画の確認
- (2) 河北町の児童生徒に育成したい資質・能力について話し合い焦点化する。

【河北町の子どもたちに必要な資質・能力は何か】

- ・情報を正確に読み取る力。表現力（説明）。思考の言語化。
- ・読むこと。書くこと。説明すること。自分の言葉で表現すること。
- ・児童同士の関わりの中で良さを認め合いながら授業をすすめる力。
- ・学んだことを実際の生活の中で生かすこと。
- ・考えを、図や式で説明する力。
- ・主体的に授業に参加し、授業を進めていく力。
- ・個々の能力差が大きい。学力の底上げを図る必要がある。

【言語活動を重視した今後の取組み】

どの学校の実態からも、特に「言語能力の育成」が課題として挙げられた。小学校学習指導要領総則には、学習の基盤となる資質・能力として、筆頭に「言語能力」が掲げられている。言葉は学習活動を支えるうえで重要な役割を果たすものであり、すべての教科における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである。

各教科等において、知識や技能を活用して思考力・判断力・表現力等を育むために言葉を使って「考える」、「伝え合う」、「まとめる」といった活動を計画的かつ意図的に行っていく。

思考の基盤となる言語能力を高めるため、各教科において単なる「読む」や「書く」だけでなく、「話す」「聞く」などを組み合わせた、より実践的な言語活動を重視した授業づくりに取り組んでいく。

2 第2回学力向上対策部会議

11月19日（水）西里小学校

(1) 全国学力・学習状況調査からみる河北町の現状と課題

①河北町教育委員会（鈴木玄輝指導主事より）

(2) 各校の学力向上の取組み

①各校での学力向上に関わる取組みの成果・課題（アクションプランをもとに）

②成果・課題を受け、今後さらに取り組んでいきたいこと

【各校の取組みから】

- ・教科担任マイスターを活用し、つけたい資質・能力と学習活動や学習課題を示した単元計画（学びのプラン）を児童と一緒に作成、確認し、授業に取り組んでいる。
- ・授業の中で、様々な考えを出し合い、お互いに学び合っていくことができるような指導を充実する。
- ・振り返りの充実を図り、子どもたちで学びをつくっていく。
毎時間の振り返り、1日の学習の振り返り。
- ・授業改善の取組み。異学年担任間で授業を仕組み、日々の授業を通し、授業力の向上を図る。
- ・朝読書の継続。放課後図書館の開放。
- ・個人総合、自由進度学習の推進。
- ・算数のスキル学習（縦割り班での教え合い、担外の先生の協力）
- ・表現力を高める言語活動の工夫を校内研究の視点にし、教師の問い返しにより学びを深めていく。

Ⅲ 成果と課題

○第1回目の部会で、「河北町の子どもたちに必要な資質・能力は何か」というテーマでの対話を行った。どの学校でも求められているのは「言語活動」の充実であり、それを通して思考力、判断力、表現力を育成することである。各校で言語活動の充実に向けた取組みの重要性を改めて確認できた。

○各校で、学力向上のための対策を学校全体で取り組んでいる。

授業改善に向けた具体的な取組みや朝の時間や放課後の時間を活用した児童の主体的な学習への取組み等、他校の取組みの成果から学ぶことが多かった。

▲各教科等の特質に応じた言語能力を育成するために適した活動であるか、また、言語活動を通して子どもたちがしっかり考えることができているかが重要である
今後、河北町の学校全体における組織的な取組みとして、言語活動を効果的に取り入れた授業づくりを進めていくことが大切になってくる。

（西里小学校 川越 雅彦）

<西里小学校>

1 学力調査等の分析と課題

○学力調査から見られる本校の課題

①国語

- ・目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、伝え合う内容を検討すること。
- ・目的や意図に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。
- ・目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけること。

②算数

- ・目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述すること。
- ・図形の面積や知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述すること。
- ・分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述すること。

2 学校で育成したい資質・能力

◎自分の考えや伝えたいことを、図や表、数や式、言葉を用いて整理しながら表現すること

- ・情報を正確に読み取り、自分の考えを伝えるために活用する力
- ・自分の考えや意見を的確に伝え、仲間と協働して課題に取り組む力
- ・目標達成に向け、協議し、粘り強く取り組む態度

3 資質・能力を身につけるための主な指導・取組み（授業改善）

- ・学習の課題を明確にし、子どもたちが主体的に学び合いながら解決していく授業を行う。
- ・交流できる場の設定・工夫をするなどして、対話が自然に生まれる学び方を工夫する。
- ・伝えたいことを適切な言葉や文章でまとめる機会を意図的に設け、全ての教科における学習の基盤となる言語能力を継続的に育成していく。
- ・国語の学習において、文章の要約や心情、人物像を読み取ること、必要な情報を見つけることなどを大事に扱っていく。
- ・算数では、ミニテストなどで自分のつまづきを把握できるようにし、これまで以上に基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指す。
- ・各教科でICT機器を効果的に活用した学習を推進する。
- ・子ども理解を大事にした、温かな学級づくりを行う。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・学級づくりを大切にすることで、各学級に安心・安全な風土が育っている。
- ・朝のスピーチなどの活動を通して、自分の考えを理由もあわせて表現することや興味をもったニュースなどの情報を自ら収集し、相手に伝えることができるようになってきた。
- ・単元を貫く課題の設定や問いを起点とした学習計画、単元構成などを意識して授業改善を重ねていく。
- ・タブレット端末を、自分の考えを交流するためのツールとして活用することができるようになってきている。
- ・考えを記述して説明することに対し、各教科で押さえるべき用語を確実に習得させたり、読む経験・書く経験を意図的・継続的に積み重ねたりしていく必要がある。

〈溝延小学校〉

1 学力調査等の分析と課題（NRTと全国学力調査から）

- ・NRTの偏差値が、国、算、理の全教科で過去4年間において下降している。しかし、それぞれの学年で偏差値が向上している教科もある。
- ・出された課題に対しては意欲的に取り組むが、より発展的な学習や創意工夫して表現する力が弱い。さらに、学力や家庭学習の内容にも個人差がある。

【国語】

- ・文章を聞き取る力、読み取る力、要旨を把握する力、丁寧な言葉で話す力。
- ・考えや感想を伝え合う力や話し合う力。
- ・目的や意図に応じて伝える内容を考える力。図表を用いて考えを伝える力。

【算数】

- ・数直線上の数、計算、小数、分数、図形。
- ・表、グラフ、□を用いた式、百分率、速さ。
- ・限られた時間内で文章題を読み取る力。

【理科】

- ・電気、結論の理由の表現力。

2 学校で育成したい資質・能力

- ・主体性………より発展的な学習に取り組んだり、創意工夫して表現したりする力が弱く、語彙や表現力が乏しいため。
- ・つながる力………地域、人、モノとのつながりが少なく、学びが学級・学校で閉じてしまうため。

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ・学校研究の中で、児童と単元計画を立て掲示し、主体的な学びを育むよう試行する。
- ・本年度途中より、放課後に家庭学習のために図書室を開放し、学習に集中したり、友だちと教え合ったりすることにより、学力アップを図った。
- ・学校と家庭で連携し、家庭学習について意識する週間「なでしこ週間」を年5回設け、保護者のサポートのもと家庭学習に取り組んでいる。
- ・毎週木曜日の朝活動を、「学力向上朝学習」とし、学力向上の意識をもってアシストシートやNRT及び過去の全国学調の問題などに取り組んでいる。
- ・NRTの結果を各学年担任が考察し、日頃からつけたい力や資質・能力を意識した指導を行い、授業改善に取り組んでいる。
- ・タブレットを活用し、音読の向上を図ったり、個々人の処理速度に応じて練習問題に取り組むことができるようにしたりして、個別最適な学びになるようにしている。
- ・有機野菜を育て、給食センターや動物園に寄贈した。その際、説明のパンフレット等も添えて直接手渡すなど、校外に発信し地域等とのつながりをもつようにした。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・学習の中で、しっかり意見や考えを出せるように成長している学級が多い。
- ・音読を大切に指導したことで、粘り強く問題文を読む児童が増えつつある。
- ・放課後、図書室で学習している児童が集中してできており、学び合いの様子も見られる。分かるようになりたいという学びに対する主体性が児童に芽生えてきている。

〈谷地中部小学校〉

1 学力調査等の分析と課題（全国学力調査から捉えた本校の課題）

- ・全教科を通じて、文章や問題文を読み抜く力、読み取る力、資料の取捨選択をする力をつけなければならない。

【国語】

- ・目的や意図に応じて、必要な情報を集め、伝え合う内容を検討すること
- ・書く内容を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えること

【算数】

- ・基礎的基本的な知識・技能の定着
- ・答えを求めるまでの解き方を式と言葉を用いて記述すること

【理科】

- ・条件をどのようにすれば良いかの検討
- ・2つの実験について、差異点や共通点から新たな問題を生み出し表現すること

2 学校で育成したい資質・能力

- ・前に踏み出す力（主体性）
- ・チーム力（協働・対話）
- ・考え抜く力（解決・創造）

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ・学校研究における授業改善の視点を生かして、日々の授業を行う。
- ・カリ・マネ表やアクションプランを作成・共有・活用することを通して、日頃からつきたい力を意識した指導を行い、授業を改善していく。
- ・基礎学力の充実を図るとともに、子どもたちが主体的で協働的に学ぶ探究型学習の授業改善に力を入れる。
- ・国語では、単元を貫く言語活動を通して、目的意識や相手意識、読むことへの必要感を持たせた授業を仕組む。
- ・算数では、単元をつなぐ授業研究を試行し、授業力向上と学力定着を結びつける。
- ・総合的な学習の時間では個人総合を年間 15～20 時間設定し、自分で課題を見つけ追究する過程を大切にする。
- ・ICTを活用し、意欲の向上、教材や意見の可視化、個別の探究活動を進めていく。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・学びに向かう姿勢が整い、落ち着いた環境の中で学習に取り組んでいる。
- ・単元計画を児童と共に作ると同時に、何を学ぶのか、何のためにこの活動をするのか、どんな力をつけるのかについて確認し、取り組むことで、課題を自分事として受け止め、学びを深める姿が見られるようになった。
- ・協働的に学ぶ活動や話し合い活動を通じて、自分の考えを持つこと、友達の考えを聞くこと、自分の考えを伝えることに慣れ、考えを広げたり深めたりする経験を積み重ねている。
- ・個人総合を通して、自分の課題に没頭して挑戦する姿が多く見られるようになり、他の教科の学習にも意欲を持って取り組むことができるようになった子どもが増えた。

〈谷地南部小学校〉

1 学力調査等の分析と課題（全国学調・NRT 結果からみた本校の課題）

【国語】

- ・目的に応じて自分の考えや感想をまとめ伝える
- ・相手や目的に応じて工夫して書く
- ・目的に応じて情報を選び、構成を工夫して書く

【理科】

- ・問題に対して、解決のための観察・実験の検証
- ・実験器具を適切に操作する技能

【算数】

- ・整数と小数のしくみ、小数のかけ算・わり算
- ・単位量当たりの比較
- ・百分率・割引きの式や値段
- ・基本図形の意味・性質の理解

2 学校で育成したい資質・能力

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| (1) 一読して内容の概要をつかむ読解力 | (3) 複数の資料から情報を読み取る力 |
| (2) 目的や相手に合わせて自分の考えを伝える力 | (4) 3つのきく力「聞く・聴く・訊く」 |

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ・週2回、朝読書の時間を設定し、並行読書やブックトーク・読み聞かせ等を取り入れながら読書に親しめるようにする。
- ・言葉の精選：語彙を増やす。読む・書く・話す場面で、どの言葉を使うのがふさわしいか、児童に問い返すなどして考える場を作る。
- ・学習や活動の目的と見通しを児童と共有し、情報の整理の仕方や交流の方法など、必要に応じて具体的な指導を積み重ねていく。
- ・目指す言語活動例や交流の仕方などのモデルを示し、適切な指導と評価を繰り返していく。
- ・学年の系統性を意識し、既習の学びを確かめながら学習を進める。
- ・ネームカードを意思表示の手立てとして積極的に活用する。
- ・学んだことを、他教科や委員会等の別の場面で生かせるように、活動場面や考える場面を設定する。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・教育課程を一部変更し、週2回採り入れた朝読書では、読書習慣が少しずつ身につけ始めているほか、学習に関わる並行読書や読み聞かせなどを積極的に採り入れた効果が表れ始めている。今後も、児童の選書の力が高まっているか、質の高い読書につながっているかを確かめながら、朝読書を継続していく。
- ・単元のまとめでどのような力がつけばよいかを明確にするために、指導者が言語活動に実際に取り組んだり、指導のポイントとなる箇所について動画で児童と共有したりするなど取り組んできた。特に低学年で、モデルを通してねらいに沿った交流や発表のよさを実感しており、系統的に学びが積み上がるように今後も目指す姿を統一していく。
- ・児童の実態を見取る精度を上げ、単元末の児童の姿を具体的に想像し、そのために必要になる指導を一つ一つ行うことをどの授業でも繰り返していく。

＜谷地西部小学校＞

1 全国学力・学習状況調査の分析と課題（本校のよさ○と課題△）

【国語】○書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落を作ったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができる。

△学年別配当漢字を文の中で正しく使うことができていない。

△時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えられていない。

【算数】○棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができる。

△簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶことができていない。

△小数や分数の加法について、共通する単位を捉え計算できていない。

【理科】○電気の回路の作り方について、実験の方法を発想し、表現することができる。

○水が氷に変わる温度を根拠に、オホーツク海の氷の面積が減少した理由を予想し、表現することができる。

△アルミニウム、鉄、銅について、「電気を通すか」、「磁石に引き付けられるか」等の知識が身につけていない。

△レタスの種子の発芽の結果から、新たな問題を見出し、表現できていない。

【質問紙】○自分にはよいところがあると思う。

○将来の夢や目標をもっている。

○地域や社会をよくするために何かしてみたいと思っている。

○友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考えに気づいたりすることができている。

△読書や新聞を読む時間が少ない。

△国語と理科に比べて、算数の勉強が好きではない割合が高い。

△算数のわけや求め方を書く問題の解答について、全く解答しなかった割合が高い。

2 学校で育成したい資質・能力

◇やってみよう【挑戦・自律】

◇かかわろう【協働・尊重】

◇感じよう・考えよう【創造・探究】

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

・全校生で算数のスキル学習に取り組み、基礎基本の定着を図る。

・学習の発表の場を設定する。学習して身につけたことを全校生の前で発表し、表現力を育むとともに、関わり合いながら学習することを積極的に行う。

・授業改善の視点を持ち、各学級で課題解決に向けた授業の展開の仕方を工夫する。

・個人の総合的な学習の時間に、担任以外も関わって研究を進める。

・筋道を立てて説明したり書いたりする力をつけるために、交流して考えたことや感じたことを書くようにする。

4 取組みの振り返りと児童の変容

・月に1～2回、「全校算数」の時間を設定し、多目的ホールで縦割り班ごとに学習したところ、意欲的に算数の学習に取り組む姿が見られた。基本的なドリルやプリントだけでなく、学年によっては、発展的な問題を用意し、各自が選んで復習できるような環境を準備した。上学年が下学年に教えたり担外の先生方から支援していただいたりして習熟の時間をもつことができた。

・学習して身につけたことを、学級や学年ごとに全校生の前で発表した。説明の順序や言葉を考えて、工夫して発表する姿が見られた。

・総合的な学習の時間に、個人で研究する「はかせちゃんタイム」に取り組んだ。子ども達3～4人のグループを教師が担当し研究を進めた。グループ内で考えたり相談したりして、昨年度よりも内容の濃い研究になった。

＜北谷地小学校＞

1 学力検査等の分析と課題（全国学調・NRTから見えてきた課題）

①国語

- ・複数の情報から内容を要約し、条件に従って文章の構成を考えながら自分の言葉で書く力
- ・叙述を基に文章全体の構成を捉えて要旨を把握する力

②算数

- ・基礎基本をしっかりと定着させ、問題解決に向けて筋道を立てて考え、それを分かりやすく表現する力（記述・言葉）

2 学校で育成したい資質・能力

- ・目的に応じて文章の構成を考えながら文章を書く力
- ・文章全体の構成を捉えて要旨を捉える力
- ・一人ひとりがしっかり考え、みんなで学びをつなぐ力（研究テーマ）
- ・児童が主体となり、協働的に深く学び合う力（複式学級を意識した授業づくり）

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ・あらゆる機会を捉え、言語活動能力の育成に努める。
- ・全校一斉読書の時間（毎週月曜日と金曜日を朝の時間）を確保し、感性豊かな児童の育成に努めるとともに、言語活動能力の向上を図る。
- ・意図的に文章を書く活動を多く採り入れていく。（文章の構成を意識して）
- ・みんなで学び合いをつないでいけるような振り返りを毎時間行い、それを次時に活かせるようにする。
- ・単元のゴールを明確にし、児童とともに確認した上で授業を進めていく。
- ・ICTの積極的な有効活用に努める。
- ・誤答の理由についてもじっくりと考えさせ、言葉や式を使って相手に分かりやすく説明することができるようにする。（書く・発表など）
- ・どこからそう思ったり考えたりしたのかを叙述をもとに考えさせる。
- ・話し手の目的や意図、聞き手の求めていることに応じて、話す際の材料を集め、分類したり関連づけたりして、伝え合う内容を考えることができるようにする。
- ・式や言葉を使ったり、具体物や半具体物を操作したりしながら、相手に分かりやすい説明ができるようにする。（書く・発表など）
- ・四則演算では、速く正確に計算ができるようにするだけでなく、計算の意味と関連づけながら計算ができるようにする。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・国語の読み取りの学習では、低学年はいろいろな学習形態（クイズ・紙芝居・創作劇など）を仕組んだことで、内容を捉えることができた。中学年から高学年にかけては、文章の中の言葉を根拠として話し合ったり、書き記したりすることができるようになってきている。
- ・国語の書く活動では、低学年は事実を書くことはできたが、自分の思いや考えを書くことが難しい場面もあった。高学年では、作文指導において字数を提示して書かせることに取り組んだので、条件に合わせて長く書くことができるようになってきている。
- ・算数では、中学年は図や式で書き表すだけでなく、言葉で説明ができるようになってきている。しかし、算数用語を使いながら分かりやすく書き表すところまではいっていない。高学年は、自分の考えを説明することができるようになってきているが、四則計算が速く正確にできなかつたり、単元によっては、図が表している意味の理解ができなかつたりする児童もいる。

〈河北中学校〉

1 全国学力調査等の分析と課題

- ・自らの課題を明確にして改善すること
- ・知識・技能を生かして文字で書き表したり、自らの考えや感想をまとめ伝え合ったりすること
- ・「授業時間以外での学習時間の確保」など、学習習慣を形成すること

2 学校で育成したい資質・能力

- ア 自ら判断して行動するための「思考力・判断力・表現力」
 - ・習得した知識・技能を活用して課題を解決するための力
- イ 自らを見つめ、向上させるための「自己調整力・レジリエンス」
 - ・自分の感情や行動をコントロールする力。困難を乗り越える力
 - ・自分の学びを客観的に振り返って価値づけたり、課題を改善したりする力
- ウ 互いを尊重し、高め合うための「コミュニケーション力」
 - ・人の気持ちや感情、場の雰囲気にくみ取り、意思疎通ができる力
- エ 意欲的・主体的に学び活動するための「自己肯定感」「他者理解」
 - ・ありのままの自分を肯定する、プラスに受け止めることができる感覚

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ア グループ学習の机間指導の際、問いを投げかけ理由や根拠を具体的に言語化させる。
- イウエ エンカウンターなどを通して、他者との良好な関係作り(問いを投げかけて考えを引き出したり、考えを肯定的に受容したりする態度)の素地を養う。
- イエ 創作した詩や短歌を鑑賞する際に作者(生徒)へ質問する時間を取り、考えを深めたり、思いを受け止めたりさせる。
- ア 出た答えに対して問いを投げかけ、根拠や理由を言語化して明確にさせる。
- イウ 課題に対する予想や自分の考えをまとめさせ、グループ活動の中で、生徒同士で議論(問い返し)を行い、改めて自分の考えにフィードバックさせる。
- ア 実験の計画を立てる場面で問いを投げかけ、既存の知識と結びつけながら必要な情報を整理させる。
- ウ スモールトークなど英会話の活動の中で、相手の発言を聞く態度を確認し、相手が話したくなるようなリアクションを生徒同士で行う。

4 取組みの振り返りと生徒の変容

- 問い返しにより、「考え・答え」に至った根拠を説明しようとする姿が見られた。
- 発問と発問をつなぐ手立てとして問い返しを実践し、思考の流れを整理・調整する上で役に立った。
- △ 問い返す場面、バリエーション、タイミングを想定しておかないと効果的な問い返しが難しい。

生徒指導部会

I テーマ

不登校未然防止のための情報共有と支援の在り方

II 活動の内容

1 第1回生徒指導部会（情報交換）

(1) 日時 令和7年7月9日（水）15：30～16：40

(2) 場所 河北町立北谷地小学校

(3) 内容

①「いじめ」I期調査認知件数と「不登校」対応数について情報交換

令和7年度町内の児童・生徒数は1117名（令和7年4月1日現在）である。当日の情報交換で確認したいじめI期調査の認知件数は、全体で237件であった。全児童・生徒数に対して約21%である。令和6年度の同会での報告では約20%という結果であり、前年度とほぼ変わらない認知件数と言える。不登校対応数としては、今年度は16件の報告があり、前年度15件に対して1名増という状況であった。

②いじめ・不登校の傾向と分析

- ・いじめに関しては、悪口やからかい、冷やかしなどが多い傾向にあった。コミュニケーション力が低かったり感情をコントロールできなかったりすることでトラブルになるケースが多々見られる。中学校ではSNSで知らない間にトラブルになっているケースも報告された。
- ・不登校に関しては、全く学校に来ていない児童・生徒も見られるが、適応指導教室「ゆうゆう」を利用したり、別室登校を行ったりして、繋がりを無くさない支援が行われている。渡部教育相談員や西塚スクールカウンセラー等の支援も非常に有効であると話題に上がった。

③その他話題に上がったこと

- ・一部の小学校では、お金を持って学区外に遊びに行く様子が見られ、各校の「くらしのきまり」等について情報共有を行った。統合を見据えて、「くらしのきまり」についても見直していかなければならないことを確認した。

2 第2回生徒指導部会（情報交換と講話）

(1) 日時 令和7年12月2日（火）15：00～16：40

(2) 場所 河北町立北谷地小学校

(3) 内容

①各校の「いじめ」Ⅱ期調査の状況と「不登校」への対応

- ・いじめⅡ期調査が全ての学校で終わっていたが、集計の途中あるいは子どもとの面談の途中等で、数字上のデータは得られなかった。
- ・いじめアンケートから大きな課題となるケースは見られなかったものの、小学校では低学年が多いことや、中学校ではSNSを使ったケースが多いことなどが話題に上がった。

②講話「アセスメントとチーム学校による不登校児童生徒等の支援」

講師 山形県教育センター教育相談課 指導主事 齋藤 昌枝 氏

- ・教育課題が複雑化してきている今日、不登校児童生徒への支援は、「社会的に自立することを目指す」必要があり、要因やその子どもに合った支援を探るためのアセスメント（見立て）をチームで行うことが大切であることを教えていただいた。
- ・チームにおけるアセスメントは、「井戸端ケース会議」のごとく、初動をできるだけ早く、パッと集まれるようにしておく。気になる児童生徒がいたら、K（気になる場所）B（生物学的要因）P（心理学的要因）S（社会学的要因）A（アセスメント・課題の本質）P（プランニング）についてケース会議を行う。特に、本人の強みや興味・関心に沿って支援計画し、大人の主観や主導で行ったり、すぐにレベルを上げたりしないことがポイントとのこと。事例に基づいて、実際にアセスメントを参加者で行って見たところである。
- ・いじめから不登校になったケースや不登校の背景に虐待が隠れているケース、発達障がいから生じる二次的な問題に起因する不登校のケースなどは、待ったなしで初期対応をできるだけ早く行うことが大切であると指導いただいた。



Ⅲ 成果と課題（○成果、▲課題）

○各校のいじめ・不登校の状況を共有し、様々なケースについて意見を交流できたことが良かった。また、齋藤指導主事の講話を基に、参加者が各校の生徒指導の中心となって、諸問題に対応していくことを確認したところである。

▲5年後の町内小学校の統合を見据えて、「くらしのきまり」や生徒指導上必要なことについてさらに情報を共有し、見通しをもって計画していかなければならない。
(北谷地小学校 真木 隆旗)

特別支援学級部会

I テーマ

「児童生徒の社会的自立に向けた特別支援教育の在り方」

II 活動の内容

1 特別支援学級部会研修会

(1) 日時 6月24日(火) 15:00~16:30

場所 河北町役場301会議室

(2) 講話 『みんなで喜び、みんなが育つ』

～社会につながる子どもの成長を支えるために～

講師 河北町立西里小学校 校長 齋藤 恒治 氏



(3) 講話内容

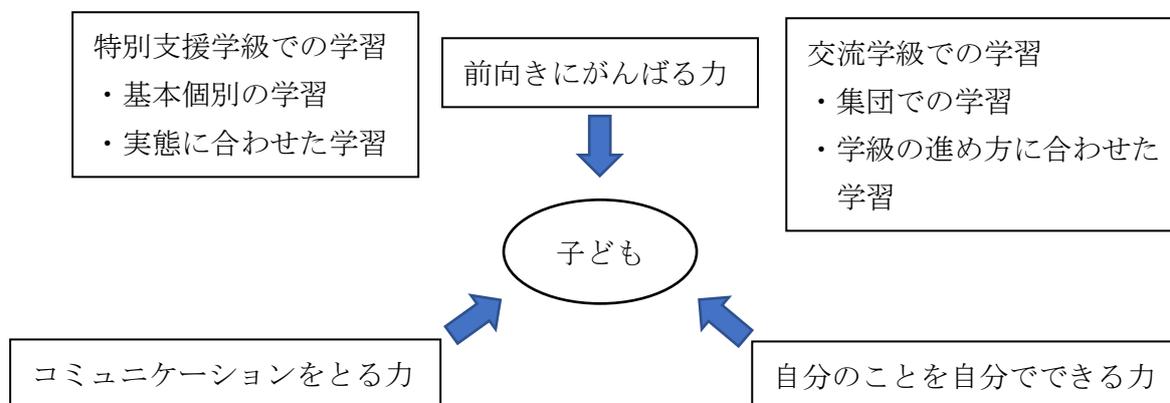
① はじめに

- 特別支援学級 → 目の前の子どもをどのようにしたいか。
 - ・親がいなくなった時に、この子はどうしていくのか…
- さまざまなことをやっても必ず成功する訳ではない。
 - ・子どもとの対話を通じて考える。

○「1」の原則、「99」の例外

② 特別支援学級がもつねらいと方向性

- その子どもは特別支援学級で、何のために学ぶのか。
 - 「自立した社会人として生きていくために…」



- ・ 日常の授業で、どのように育てるか。
→ 学習で意識した活動や取組みをしていく。
- ・ 教師はどのように子どもを見取っていくか。
- ・ 課題と考えられるところをよさとしてとらえること。
- ・ リフレーミング → いろいろな角度から子どもを見取っていく。

③ 演習Ⅰ「保護者からの相談」

- ・ 一方向の価値観だけで判断してはいけない。いろいろな見方で、子どもを見ていくことが必要。
- ・ 推測や思い込みで「汲み取った」つもりにならず、子どもの思いや考えを、じっくりと聞き取ることが大切。
- ・ 保護者に対して、一方的に考えを伝えるだけでなく、同じベクトルの中でお互いが理解し合えるようにしていくことが大切。

④ 社会的な自立を目指して（将来を見据えて）

- ・ 教育相談→今後どのような力をつけていくのか。ポジティブに話し合っていくこと。失敗体験ではなく成功体験を。

- ・ その子の「強み」はどんなことか
- ・ 大人になったとき、どんな姿であってほしいか。

→ 天才的な能力を引き出していくことが大切。

⑤ 演習Ⅱ「保護者・子どもとの合意形成を図ること」

- ・ 保護者の思いを十分に汲み取った上で、本当の意味でその子どものためになることはどんなことなのかを考える。
- ・ 保護者との合意をどのように形成するか。ビジョンを持った話し合いを行う。
→ なぜ特別支援学級に在籍することにこだわったのか。
- ・ 将来の社会人としての姿をイメージし、寄り添う姿勢で話し合う。

⑥ 大切にしていきたいこと

- ・ 子どものよさ（強み）を見つける（引き出す）援助を行う。
- ・ 子ども、保護者と同一ベクトルになるような情報を提供する。

Ⅲ 成果と課題

○ 今回の研修において、より多角的・多面的に子どもを見て、その子どもの持つ強みを引き出すことの大切さについて理解することができた。

○ 演習を通し、保護者・子どもとの合意形成をどのように図るかを学ぶことができた。

▲ 子どもの進路に関する一貫した指導・支援に向けて、家庭と学校との連携を図る必要がある。

(河北中学校 吉田 匠)

保健部会

I テーマ

『養護教諭の執務の向上』



II 活動内容

- 第1回 令和7年5月7日（水） ・今年度の研修テーマと研修計画についての話し合い
第2回 令和7年10月23日（木） ・研修会 ※詳細は下記参照
第3回 令和8年1月22日（木） ・今年度の反省と来年度の研修についての話し合い

1 第2回保健部会【研修会】について

(1) 日時・場所 令和7年10月23日（木）

14:30～16:30 河北町役場301会議室

(2) 講話テーマ 「がん教育を考えよう ～がん看護体験から伝えたいこと～」

(3) 講師 一般財団法人三友堂病院 地域緩和ケアサポートセンター

看護師長 がん看護専門看護師 認定がん専門相談員

松田 芳美 氏

(4) 講話の内容

①がんの基礎知識とわが国の現状

- ・がんとは、私たちの体を作る細胞ががん化したもので、個のがん細胞が繰り返し分裂して「がん組織」を作り、病気として現れるもの。
- ・日本人の2人に1人が一生のうちにがんと診断される時代になっている。
- ・がんになったから人生終わりではなく、残りの人生をがんと共に生きてゆく「がんサバイバーシップ」についてもっと知る必要がある。

②学校における「がん教育」を考える

- ・がん教育とは、健康教育の一環として、がんについての正しい理解と、がん患者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育である。
- ・がん罹患者やがん患者の家族への十分な配慮をしながら、外部講師を活用する。

③がんの親を持つ子どもの支援

- ・支援の本質は、その子どもが安心できるように支えること。

- ・子どもの日常生活を維持しながら、家族の一員としてできることを子どもと一緒に考える。
- ・学校だけではなく、医療機関や子どもに関する公的相談機関で連携し、子どもを支えていくことが大切である。

(5) 講演をお聞きしての感想（一部抜粋）

- ・今回の研修を通して、初めてがん教育を身近なものとして感じる事ができた。ぜひ積極的に外部講師を活用しながら、自他の健康と命の大切さを考えられるような授業をしていきたいと思った。
- ・がん教育の基本知識や支援のあり方などについて学ぶことができ大変勉強になった。小学校では、「病気の予防」の単元で少しがんについてふれる程度だったため、がん教育を主体とした授業を実施したことはなかった。今回、外部講師との連携などについても詳しく話を聞くことができたため、今後がん教育を実施する際にはぜひ参考にしたいと思う。また、発達段階を考えると、小学校ではがんの専門知識よりも健康の大切さを、そして実際に家庭内にがんサバイバーがいる児童生徒への個別支援を特に大切にしていきたいと感じた。
- ・私たち大人や子どもたちの身の回りでもがん患者は多く存在しているので、このような教育は大事だと感じた。ただ、具体的に取組もうとすると少々難しい。
- ・がん疾患の発生要因からがん教育の学校における法的位置づけ、がん患者の親を持つ子どもの支援などわかりやすく講演していただいた。より具体的な内容であったため、がん患者の親を持つ子どもへの支援は、実際の場面で活用していけると思った。また、身近にがん専門看護師・認定がん専門相談員さんがおり、心強いと思った。
- ・がんという言葉への恐怖や偏見を減らすためには子どもが安心して話せる関係や環境づくりが重要であり、情報を隠すのではなく、年齢に応じた説明や言葉がけが必要なのだと感じた。保健室は日常的に子どもが立ち寄る場なので、相談のハードルを下げて気持ちが出出できる雰囲気づくりを意識したいと思う。

Ⅲ 成果と課題（○成果 ▲課題）

- 5年後の町内小学校統合に向けて、就学時健康診断や健康カード配付方法の見直しなど、共通理解を図りながら、事務の効率化を進めることができた。
- がんに対する知識を深め、がん教育の推進の仕方について学ぶことができた。河北町の子どもたちが心身共に健康で幸せに生き抜いていく力を身につけられるよう尽力したい。
- ▲「がん教育」について、今回の研修で得た学びを各校の実態に応じて実践していく。

（谷地中部小学校 加藤 志穂）

幼小連携部会

I テーマ

「幼児教育と小学校教育のつながりのあり方について」

II 活動の内容

1 第1回幼小連携部会

- (1) 日時 令和7年6月30日(月)
前半 9:30～11:00
後半 14:30～16:40
- (2) 場所 前半 かほくあいこども園
後半 河北町立谷地西部小学校
- (3) 内容



【保育参観】 自由活動 0～5歳児

【講義】 国や県の動向～幼こ保小連携～ 幼こ保小連携を進めていくために
村山教育事務所 指導主事 梶沼 瞳 氏

- ① 国の動向としては、令和6年10月に「今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会 最終報告」が出されている。その中では、「幼児期においては、遊びを通しての指導を中心に行うことが重要。」と記されている。幼児教育と小学校教育との円滑な接続については、『国には、「幼保小の架け橋プログラム」を推進しており、一部の地域では、子どもの主体的な姿がより見られるようになってきているなどの成果が上がっている。しかし、全国的にみると未だ不十分である。』とある。
- ② 県としては、県作成リーフレット「つなぐ」や幼小通信で、「事例を通して学ぶこと」ができるようにしている。第7次山形県教育振興計画でも方針1「一人ひとりが自分らしく可能性にチャレンジできる学びを実現する」で幼児教育の推進を重点に挙げている。令和8年度以降には、「幼児教育センター（仮称）」を立ち上げ、幼児教育アドバイザーの派遣を計画している。
- ③ 幼児教育では、遊びを通じた直接的体験から、生きる力の土台となる資質・能力を育む。小学校では、学級を中心とした集団における指導になるが、スタートカリキュラムを実施し、「学ぶことが楽しい。学びが遊び。」というような緩やかなスタートにする。

(4) 感想

- ・幼児教育で大切にしていることを、実際の保育を通して小学校の先生方に感じていただけてよかった。子どもの育ちを見通し、発達段階に応じた関わりが大切だと改めて感じた。

- ・かほくあいこども園での参観、情報共有、梶沼先生のお話を通して、幼児期の学びが小学校での学びにどう繋がっていくかがより明確になった。
- ・グループ討議では、小学校の先生方と話し合う中で、園で行っていることが学校につながっていることを感じる事ができた。

2 第2回幼小連携部会

(1) 日 時 令和7年11月25日(火)

13:30～16:30

(2) 場 所 河北町立西里小学校 食堂

(3) 内 容

【授業参観】 1～6年 授業参観

【講義】 「幼小をつなぐために」～南部小の実践を通して

寒河江市立南部小学校 校長 白田 敏幸 氏

①南部小学校の「スタートカリキュラム」で取り入れた教育活動は、「①幼稚園、保育園からのつながりある活動 ②生活科を中心にカリキュラムを構成 ③子どもたちと一緒に話し合う時間(考えさせる時間) ④子どもの興味・関心から教科につなげる」である。そして、この活動の場として「はっけんタイム」「はなしあいタイム」「きょうかタイム」を設定した。

②1年生の指導では、「苦手なものをなくす」だけにならないように気をつけ、「あなたは、今何がしたいの？」と問うことで、自分で考えて行動できる力を育成していく。また、子どもの行動をよく見て、課題を教科の学習のめあてにするなど、「遊び」から「学び」へつなげていく。

(4) 感 想

- ・西里小の授業参観では、子どもたちの姿、環境などが園とのつながりもあり、今やっていることが学校での生活につながっているのだと安心した。
- ・白田校長のお話を聞いて、今、私たちが実践していることが「これでいいんだな」と再確認でき、「こんなことにも挑戦してみたい」という思いが明確になり、とても学び多き時間だった。
- ・架け橋プログラムをもとにした話し合いをすることで、よりこども園、幼稚園での活動を小学校生活に活かしていけると感じた。



Ⅲ 成果と課題

○園と小学校の先生が、双方の学習・活動を参観したり、グループ討議で情報交換をしたりすることで、指導法や課題に対しての対処法を共有することができた。

▲小学校統合に向けて、園や小学校での子どもの実態を交流し合い、幼小連携部会として「河北町として育てたい子どもの姿」について考えていく。

(谷地西部小学校 佐藤 和也)